

ローマの国際会議

双生児研究会会長 井上英二

第6回国際双生児研究会議は1989年8月、1974年の第1回以来、15年ぶりにローマで開かれた。ローマはこの会議の母体である国際双生児研究協会 (International Society for Twin Studies) の本拠であり、協会の生みの親であるProf. L. Geddaが主宰するMendel研究所の所在地でもある。

Prof. Gedda は今年87歳とのことであるが、8月28日の法王謁見をはじめ、開会式や協会の総会にも元気な姿を見せていた。会議の実際の運営はProf. P. Parisiがとり仕切っていたが、彼は協会の事務総長 (Secretary General) であり、協会の機関誌であるActa Geneticae Medicae et Gemellologiae の編集幹事 (Executive Editor) も兼ねている。

会議の主体はローマの中心にあるホテルで行われたが、前日の法王謁見は夏の離宮であるCastel Gandolfoで、同日夕方の開会式は博物館でもあるSala d' Ercole (ヘラクレスの部屋)、続いて行われたレセプションはローマ時代の建築物の破片 (といっても大きなものであるが) が転がっているVilla Caffarelli の庭園で、また最終日の晚餐会はこれまたバチカン政庁の一部である博物館か美術館のような中世の建物の中で行われた。日本からの出席者は異口同音に、3年後の東京の会議ではどうしたらよいかと思案顔で囁きあったものである。東京の次に予定されているシカゴの Keith氏も同様であったので、「都会は皆それぞれの顔を持っている」といったところ、だいぶ安心したようであった。

会議の学問的な内容は詳しく紹介する余裕はないが、全般的な傾向として、双生児研究の発祥の地であるヨーロッパと比べてアメリカの発展が目覚ましいといえるだろう。とくに数学的なモデルとコンピューターを使った量的形質の遺伝率 (heritability) の推定が盛んである。このような「双生児法」を使った研究と並んで、双生児自体の研究—例えば出産頻度や発育の研究—もますます盛んになっている。日本も小保内虎夫先生や駒井卓先生の先駆的研究以来、双生児研究での先進国の一つであることは間違いないが、日本の兄貴分であったドイツが第二次大戦以来振るわないのは些か淋しい。

8月30日に開かれた協会の総会で1990年から3年間、会長を仰せ付かることになった。実際の事務は協会本部の Prof. Parisi やわが双生児研究会の事務局が担当するが、3年後の東京での国際会議は是非とも成功させたいものである。学問の世界でも日本は今や世界の注目の的となっている。会員各位の絶大なご後援をお願いしたい。

第6回国際双生児研究会議に出席して

人口問題研究所 今泉洋子

国際双生児研究会議への出席は、第3回のエルサレム以来、ローマで4回目になった。どの会議もそれぞれ特色があったが、ローマでのソーシャルイベントには、日本からの出席者一同が驚かされた。これらの内容については、井上会長が述べているので省略したい。この会議は1989年8月28日から31日まで市内のAmbasciatori Palace Hotel で開催され、20カ国301名の研究者などが出席した。わが国からは13名が出席し、シンポジウム1題、ワークショップ2題、一般報告5題、ポスターセッションで7題の発表が行なわれた。

8月29日の役員会において、会長の Dr. Erikssonから次期開催地は日本に決定したいとの提案がなされ、全員の賛成を得た。翌30日の夕方に開催された総会で、正式に日本が次期開催国に決定された。また、次期役員選挙が行われ、本研究会会長の井上先生が同協会の新会長に選出された。

次に、全体のプログラムの概要を下記に示しておきたい。

★会長講演

★シンポジウム――8（40題）

ふたごの生物学

ふたごの発生学

ふたごの発育と成長に関する研究

別々に成長したふたごと養子研究

psychophysiology と行動についてのふたご研究

臨床医学におけるふたご研究

ふたごレジスターと確認方法の標準化

予防医学と薬物への暴露についてのふたご研究

★ワークショップ――8（51題）

ふたご研究の方法論、遺伝疫学におけるふたご研究、ふたご研究における分子遺伝学とその他の遺伝技術、多胎妊娠と増殖の介助、三つご以上の多胎出産、ふたごの長期研究と追跡、ふたごと家族の相互作用に関する社会心理的側面、ふたご団体等の組織とサービス・システム

★一般報告――60題

★ポスターセッション――69題

★フォーラム――2題

双生児出産頻度 (Twinning rate) 関連の演題を聞いて

帝京大学医学部衛生学教室 野中 浩一

私の教室では双生児出産頻度、とくにそれに関連した母親の生物学的特性や、環境要因の作用を前提とした双生児出産の季節性（いわゆる vanishing twin の現象も含め、かつ、その季節性要因の世代間の影響もふくめた広い意味です）に関心をもっており、今回のローマでの学会でも、関連のセッションに座っていましたので、印象に残ったことなどを報告させていただきます。なお、私自身は双生児研究に関わるようになってまだ日が浅く、とても総括的なまとめをするだけの力がありませんので、誤認も含めてかなり偏った印象記になることをあらかじめご了承ください。

会議の最初に行なわれたシンポジウムS1 (The Variability of Twinning Rate) では4つの演題が発表されました。最初の2つは、この分野では大御所の Dr. Parisi と Dr. Eriksson による演題で、双生児出産頻度の長期変動に関するものでした。近年の DZ twin の減少は、母親の出産年齢が若く、出産順位が小さくなったことで説明されることが多いのですが、この年齢・順位の両者で訂正したらどうなるか、というのが当然、実証的な証拠を示すために次に必要になるわけです。Dr. Parisi の発表を聞いた限りでは、広範囲な計算と比較検証はまだこれからだ、と思われましたが、とりあえずのところ、年齢訂正したうえで DZ 率の比較では、アメリカとイタリアとでは違いがありそうでした。これに関連してPS1のセッションの Dr. Fellman と Dr. Eriksson の「Standardization of the twinning rate」の演題は必見と思って勇躍出かけたのですが、予定の時間には発表者がいま忙しくて……とアナウンスされ、そうこうしているうちに無しで終わったようです（長時間手洗に立っていたことはないはずなのですが）。3つめは私の教室からの発表で、多産で知られるハッテライトの双生児率を調べたものです。ただし、なにしろ双生児総数 103組という小規模のデータで（後ろ向きの歴史的データにしては双生児同定の質はかなり高いと自負していますが）、これも一応ポピュレーションベースのデータとはいえ、標本数を比べられるとちょっと苦しいところです。ただ、多産集団と双生児出産率の関係、言い換えれば、「多産と双生児の産みやすさとはどんな関係にあるのか」という視点に、昔から興味をもたれていたためにシンポジウムに入れてもらえたようです。「双生児出産は出産力の高さを示すのか」という問題ともからめて後述しますが、「多産集団で双生児頻度は低い、少なくとも高くはない」というのがここでの私たちの結論です。最後の Dr. Doherty の発表は、視点

が斬新でした。内容はすでに機関誌に発表されているものとほぼ同じでしたが、各国の統計データから、身長が大きい国は、乳癌死亡率が高く、DZ双生児出生率が高いという傾向を報告しています。日本をこの枠組みに入れるのはちょっと苦しいと思いますが、面白い視点です。もしこれが因果関係を表わしているのであれば、基礎にあるのはホルモンでしょうか？

個人的に最も興味をもって望んだのが、S1に続いて行なわれたS2 (The Embryology of Twinning) でした。このシンポジウムの座長をしたDr. Boklageは、前回のアムステルダムでの会議で私が最も印象に残った人で、Weinbergの卵性推定式の前提に重要な疑問を提出した（といっても、そのこと自体はもう古典的な問題ですが）ことが印象に残っています。今回のシンポジウムには、残念ながら、予定されていた発表者のうち、Dr. HarlapとDr. Bomsel-Helmreichの2人が出席できず、その分を座長が要約するという形式での議事進行となりました。とくに、Dr. Harlap の論文は、女性の排卵と受精（正確には授精というべきかもしれませんが）のタイミングによって、MZとDZの卵性に偏りがあるとする興味あるもので、単胎の出生性比の変動にも興味をもっている私には、女性の月経周期と受精のタイミングによって出生性比が偏ることを示した実証的論文で印象に残っていたDr. Harlap の欠席は残念でした。Dr. Yongbloetは、私の教授であるDr. Miuraの提出している「季節性不妊因子仮説（双生児にも関係ある）」に真っ向から対立仮説をだしてきました。ただ、正直に言って、かれがあまりにたくさんの内容を一度に盛り込んでしゃべったために、私以外の人には何が問題なのかよくわからなかったのではないのでしょうか？ 再度、正直に言えば、私たちの仮説の核心にある（胎児期における環境の影響が成人後も残るという形で）世代を超えて伝わった季節性因子の影響が、やはり季節に反応して現れるという事実の認識が、かれの対立仮説では希薄です。セッション後にかれは、自分のほうが考える因子が少ない分だけ「monolithic」だと強調していましたが、生物の世界は、すくなくとも分子レベルを超えたマクロな意味では、物理学の世界とは違ってそう単純じゃないと、私は考えています。（念のために断っておきますが、論争しているのは学問上のことだけで、孤軍奮闘して頑張っておられるDr. Yongbloetは、そのお人柄も含めて心から敬服しています。私たちの教室で出版した論文集を、おそらく世界中でもっとも丁寧に読んでくれている人です）

もう一つ、同日の午後に行なわれたPS1 (Biology of twinning) のセッションについて簡単に報告しておきます。私がこのセッションを聞きにいったときには「双生児を産んだ母親は出産力が高いのか、それとも低いのか」という問

題が頭にありました。数学的なモデルをもとにした、Dr. Phillipeの結論は、M Z twinの出産は、閉経期の卵巣の機能不全と関係があるというものです。これは、私たちが前回の会議で発表した「last birth phenomenon」、つまり、双生児出産は、母親の出産年齢と関係なく、最終子の出産で起こりやすい、という現象と表裏一体の面があり、学会のあとも、奇妙な縁で私の次の訪問地であった、Phillipe氏の本拠地モンテリオールでさらに議論を深めることができ、基本的に双生児の母親は（少なくとも双生児を産んだ時点では）むしろ出産力は小さくなっている（彼の意見では厳密には同性双生児に限られますが）という見解で一致しました。なお、疫学者として、学会全般にもっと標準的な疫学手法が取入れられるべきだ、というかれの感想は、個人的には耳のいたいところでした。双生児の母親の出産力（fecundity）に関していくつか古典的な論文を書かれたDr. Wyshakは、今回は双生児の母親は妊娠のロスが多いという発表をされておりました。私のチームの中村（帝京大）の発表は、超音波診断によって、vanishing twinの頻度を前向きに調査し、その季節性を見たもので、およその結果はすでに日本の双生児研究会でも発表してあります。「現在の日本は一般出生の季節性が小さくなっているのに、早期流産（双胎、単胎両方）に季節性があるのはなぜか？」、「季節性流産因子仮説と季節が一致しないのではないか？」などという、かなり鋭い質問がDr. Jongbloetから出されました（かれはよく勉強しているのです）。Dr. Parisi が代読した、イタリアの双生児出産頻度の季節性（冬に多い）は私には興味深いものでしたが、正当な統計学的センスからみて、あの検定法はおかしいとDr. Phillipe が言っていました。この点に関しては私も他人ごとでないので、現在は万能の季節性検定法がないことを私が主張したら、Dr. Phillipe もとりあえず納得していました……（帰無仮説は簡単だが、いったい対立仮説として設定する「季節性」とは何かという前提が曖昧なのが原因です。もちろん、年間1つの山と谷をもつサインカーブを「季節性」と定義すれば、Edwards, Rogers, Elwoodなどの手法があるのですが、私は、サインカーブだけを「季節性」と限定するのは、重要な見逃しを生じるのではないかと考えています）。季節性に関する演題はけっこう質問も活発で、古典的な話題ながら、原因まで考えていくと奥が深い問題ですので、次回の日本の会議でさらに演題が増えるようになれば楽しみです。

読み返してみても、予想通り単眼思考、視野狭小な印象記になってしまいました。もっと勉強して、機会があれば、もっと包括的なまとめが書けるようになりたいものだと思っています。今回はこれでお許し下さい。

第6回国際双生児研究会議「ワークショップ5 品胎及びそれ以上の多胎出産」を聴く

東京医科大学産婦人科学教室 又吉國雄

国際会議も3日目になるとかなりうちとけてくる。会場のあちこちで談笑している人の輪から、時おり大きな笑い声が聞こえる。それをよそに、ぐったりとソファーに体を沈めているのは、昨夜のナイトツアーで寝不足気味の人達であろうか。また、抄録集そっちのけで市内地図に見入っているグループは、残り少ないローマ滞在の観光プランでも練っているに違いない。

「ワークショップ5 品胎及びそれ以上の多胎出産」は、そのような雰囲気の中で開かれた。それでも地下の会場は満室で、立見さえできている。抄録集の5題に追加があり9題に増えたことで座長の Louis Keith 教授（アメリカ ノースウエスタン大学）と Emile Papiernik 教授（フランス パリ大学）は各演者を回って発表の時間厳守を要請する。Keith 教授自身一卵性双生児であり、学会には兄弟で参加されていた。それよりも、抄録集末掲載の演題が飛び入りで発表されたり、示説を更に口演で発表するなど、臨機応変に運営されているのがいかにもこじんまりとした国際学会らしくて面白い。

午後10時45分、定刻に開始された。

いくつかを順を追って紹介しよう。

先ず「品胎及びそれ以上の多胎出産研究における産科学的側面」。イギリスのマンチェスター大学の Dr. Daw の発表である。1979年から1985年にかけて出産された450例の品胎以上の多胎出産について、早期診断からその後の母児管理まで産科学の面から言及したものである。その間の多胎出産が排卵誘発剤の使用と共に上昇しているとの指摘は当然であろう。

次いで、デンマークの Dr. Borlum は、「デンマークにおける品胎 1980-1989」を講演した。北欧人は黒人に次いで多胎が多いことで知られている。中でも、双胎を例にとると、デンマークが最も高い頻度を占めている。その事からも興味を持って聞いたのだが、内容は現在妊娠中の9例を含む82例の品胎についてのレビューであった。頻度は8, 730から7, 350出生に1例というから確かに高率である。母体の平均年齢は28.5歳。しかし最年少が17歳というのがデンマークの社会環境をうかがわせる。殆ど(96%)が37週以前(平均33.4週)の出産であるが、3児の平均児体重は1, 800g前後を占めている。ここでもIVF-E Tによる多胎傾向の上昇が論議された。この報告でも、11例はその方法による妊娠だという。

次はフランスの Dr. Pons の「品胎妊娠の管理」。1977年から1988年の間の32例の品胎の解析である。品胎の診断は 13 ± 6 、4週という早期になされているが32組96児中生存児が9児と著しく少ないのが気になった。かなりの頻度でRDS（呼吸促進症候群）が認められているようである。

続いては日本からの演題で「日本における品胎及びそれ以上の多胎出産」。演者は今泉氏。1951年から1987年に至る出産統計を駆使しながら、最近の多胎出産の傾向を話されたが、それによると品胎は100万出生に対し58、四胎は0.93、五胎は0.77であるが、1975年以降は、多胎出産の統計にもかなり排卵誘発剤の影響が出ているようである。座長の Keith 教授とは旧知の中で、くつろいだ雰囲気の中で発表を終えられた。

その次は小生（又吉）が「品胎11例の観察とその予後」と題して、東京医大病院で過去18年間に経験した11例の症例を紹介し、胎盤所見からの卵性診断を試みた。ちなみに一卵性が4例、二卵性が2例、5例は卵性診断不能であったが、11例の全てが自然排卵によるものであり、しかも全て経膈分娩で出産されたことが注目されたようである。

次いでイスラエルから Dr. Goldberger による「多胎妊娠時の一子又はそれ以上の胎内死亡例における保存的管理」。症例として、中期一児死亡例の双胎2例、品胎での中期二児死亡例1例、四胎における後期一児死亡例が1例であったが、多胎妊娠の経過で、生児と死亡児に分かれた場合、そのまま保存的に観るか、或はどの時点まで生存児を follow していくか常に問題になる。演者らは、MEや凝血学的検査を行いながら保存的に観察していった経過を報告したが、周到な管理と言えよう。

次は西ドイツに本部を持つ“国際ABCクラブ”の代表 Dr. Gritzner の発表で「品胎及びそれ以上の多胎、治療への疑問又は失敗?」。ABCクラブというのは、品胎及びそれ以上の多胎の児や家族で構成されている国際団体であり、最も古い会員は1912年生まれの五つ子である。新生児管理の進歩にもかかわらず、その時期に多くの児が失われたり、障害を残したまま生育している例をあげ、児だけでなく、その家族にも大きな影響が及んでいることを強調された。これまでの発表と異なり、多胎のかかえる問題を社会医学的な面からとらえており、聴衆も得るところが多かったと思う。

演題は他に、アメリカのジョンホプキンス大学から「多胎妊娠の栄養」について発表があり、ワークショップの最後は、フランスの女医による「多胎出産の心理学的側面」によって締めくくられた。

これらの詳細は省略するが、品胎あるいはそれ以上の多胎妊娠をめぐる、これ程多彩にとり上げられ、これ程多角的に討論される機会というのは、本当に希であろう。開会前の両座長の必死の懇願にもかかわらず、大幅に時間が延

長したのも、蓋し当然である。

以上、ワークショップ5のいくつかを紹介したが、その日のトピックスとしても一つ大書することがあるとすれば、その日の夕刻、次期開催地の日本招致が、正式に決定したとの朗報が、日本人参加者に届けられたことであろう。

ツインレジスターについて

人口問題研究所 今泉洋子

シンポジウム「双生児の登録と確認方法の標準化」について、オーストラリアの D. A. Hay博士が座長になり、6人の演者の発表が行われたが、このうち幾つかについて紹介をしたい。

ヘルシンキ大学の J. Kaprio博士らは、北欧諸国における双生児登録について報告を行い、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンにおける人口ベースの双生児登録は、科学のおよび医学的研究の為に非常に貢献をしてきたことを報告した。また、演者の所属しているフィンランドの双生児コホートは、1958年から1986年までに生まれた、全ての多胎児を含み総数で23,500組に達している。彼らはこれらの資料を用いての研究発表を行った。

次にミネソタ大学の T. J. Bouchard博士らが、ミネソタの双生児登録について報告をおこなったが、ここで発表した内容については省略したい。Bouchard博士は別々に育てられた一卵性双生児を対象とした研究で、特に有名な心理学者であることを付記したい。

次にアメリカの J. Goldberg博士らがヴェトナム時代の双生児登録について講演を行った。ヴェトナム時代の双生児登録は7,369組の男同士の一卵性と二卵性双生児から成っている。これらの双生児は1939年から1957年生まれで、共にヴェトナム戦争時代に米軍に勤務していた。これらの双生児のうち4,774組については、各組毎に28ページにわたる健康調査が完成している。彼らの85%は35-44歳であり、93%が白人、6.5%が黒人である。現在、彼らは健康であるが、まもなく慢性疾患が出始めるコホートにある。まだ、現在のところは喫煙と飲酒について、双生児間の不一致が報告されているだけであるが、将来この登録は医学研究の上で有用になるであろうと報告された。

最後に、メルボルン大学の P. L. Derrick博士はオーストラリアNHMRC (

National Health and Medical Research Council) 双生児登録についての、データ・ベース管理について報告を行った。科学的登録環境における双生児資料の管理は、データ・ベースの設計と、科学研究の為の道具としてのデータ・ベースの利用に関しての報告であった。NHMRC 双生児登録は18,000組以上の双生児の登録情報、8,000組以上の双生児についての質問票、その他の質問票などから成っている。また、新しい双生児の登録、既存登録者の住所、その他の情報について常に最新情報を把握する為に、年刊ニュースレターを登録されている全双生児に発送し、宛先不在として戻って来た双生児を削除していることなどについても報告された。

わが国における双生児登録は、井上英二先生らが東大脳研で30,150組(1980年)について報告している他に、松井一郎先生らの神奈川県双生児レジスターがある。今後これらの資料をもとに、成人病などの調査に利用されることを期待したい。また新らしく、このようなレジスターが誕生することを期待したい。

第6回国際双生児研究会議に参加して

近畿大学医学部公衆衛生学教室 早川和生

ローマにて開かれた第6回大会に出席した際の個人的な印象を少々書かせてもらいます。

筆者の乗った成田発の英国航空機は、突然のエンジン故障のため35時間遅れでローマに到着し、大会会場に着いた時は、既に研究発表が始まっていました。長時間(二日半)のフライトで多少疲れていましたが、会場は日本からの参加者が多く心強く感じました。

筆者らの発表はポスターセッションでしたが、ポスター発表69題と前回大会(アムステルダム大会)に比べてかなり増加した感じでした。ただ、各会場を回ってみた印象では、全体の大会参加者は前回より少なかったような気がしました。会場がローマだったので参加者が旧跡見物に出かけてしまったのかも知れません。参加者の半分ぐらいが女性のためか大会会場は、前回同様に常に華やいだ雰囲気がありました。

口頭発表、ポスター発表とも研究発表の内容に関しては、研究方法、データ解析手法などきわめて高度な水準に達している発表が多く、個人的に大変刺激を受けました。自分自身、今後、かなりの研究テクニック等をマスターしなけ

ればならないと痛感しました。疫学領域の発表では、台湾の Dr. Chen 氏は一人で精力的にいくつも発表をこなし、そのエネルギッシュな多彩な活動には同じアジア人として感嘆させられました。

大会総会では、投票で次期会長は井上英二先生、次期開催地は日本と決定されました。組織上、日本がリーダーシップをとれる形になったことは感慨深いものがありました。今後は、研究水準の面でも日本人全員がリーダーシップを取れるようになることが若い双生児研究者全員にとっての大きな課題になっているような気がしました。

双生児の母親の集い

ツインマザースクラブ 天羽幸子

一般に研究会議に研究の対象者があらわれたり、ましてやその母親達が参加するなどということは、非常に珍しいことだと思うが、今回国際双生児研究会議に初めて出席して、私も研究者と母親の両面から眺めることができ、このようなユニークな研究会議の進め方は大変興味深く思われた。

母親の集まりとしては、The Council of Multiple Birth Organization (COMBO) として、研究会議にも Collective Members で一人 Vice President を出している。今回まではイギリスの Mrs. Judi Linney (U. Kグループの President であり、Public health service の専門家でもある) があたり、次の Vice President はオーストラリアの Mrs. Christine Gleeson が選ばれた。

今回代表者が出席したのは、オーストラリア、カナダ、フランス、西ドイツ、日本、南アフリカ、アメリカ、イギリスで、その他に三つ児以上の本人達の会のイギリスの会員と、ふたごの会のインドネシアの人達が出席した。

アメリカからは二つのグループが参加しており、The national Organization of Mothers of Twins clubs (NOMOTC) は創立も古く、組織力も強い。もう一つの Twin Services は主に西海岸を中心に活動しているようだった。イギリスは (United Kingdom として)、たくさんの地方支部をまとめた形で、年3回の会報の他に、「おっばいの与え方」、「双子と言葉の発達」など目的別のリーフレットを作って積極的に活動している。他に Dr. Elizabeth Bryan を中心にした Multiple Birth Foundation も新しく活動を始めている。オーストラリアは Australian Twin Registry をつくり、本やスライドを使って、母親達の教育をしたり、三つ児の両親に経済的援助ができるように働きかけている。

その他、西ドイツからは三つ児やそれ以上の多胎児を持つ家族の組織として活動している Helga Gruetzner という元気のよいおばさんが出席し、集会在英語で行われているので、英語圏の人は初めのうちはゆっくりはなしていてもだんだん早口になるのを「もっとゆっくり話して」と声をかけてくれ、私は大いに助かった。

このようなクラブがあるのは、今回参加した国ばかりでなく、オランダ、ノルウェイ、イタリア、ニュージーランド等にもあるが、やはり言葉の問題が関連してか、今度もローマで開かれているのに、イタリアはイタリア語のパンフレットだけが置かれており、誰も参加していなかった。

アメリカの NOMOTC は 1960 年に創設され、その次が日本で 1968 年、1976 年に南アフリカ、77 年にカナダ、78 年にイギリスと続き、日本は双生児の出生率は低い国といわれているのに、クラブの歴史は古く、会員数も多いことに、他のメンバーは驚いていた。

今回は活動状況などのごく表面的な話題に終わったので、次回の東京では一般的な家庭に招いて、双生児の子育てを中心に、広く教育についての話し合いの輪を広げたいと思っている。

第 7 回国際双生児研究会議登録料の前納についてのお願い

1992 年 6 月下旬、東京で開催予定の第 7 回国際双生児研究会議の準備委員会は 9 月 25 日に発足しました。また、11 月 7 日には第 2 回準備委員会が開催され、研究会会員で参加予定の方に上記国際会議の登録料の前納をお願いすることに致しました。登録料は正会員が 3 万 5 千円です。ご協力頂ける方は下記の口座にお振り込み下さるよう、よろしくお願い致します。

第 7 回国際双生児研究会議準備委員会

口座番号 第一勧業銀行本郷支店 075-1623682

加入者名 第 7 回国際双生児研究会議 (Twin Congress' 92)

財務委員会 浅香昭雄

The 2nd Methodology on Twin Studies に参加して

大阪大学医学部環境医学教室 白川太郎

第6回国際双生児研究会議が終了すると休むまもなく、私はローマから空路ベルギーのブリュッセルへと飛んだ。第2回双生児研究方法論セミナーに参加するためである。本セミナーは双生児研究の一つのモデルとして開発されたコンピューターソフトであるL I S R E Lの実習セミナーであり、世界中からこの分野に関心のある若手研究者が40名参加して行われた。その内訳は、欧米（英国7、米国14、ベルギー6、オランダ2、ソ連1、ノルウェー3、スウェーデン2、カナダ1）、アジア諸国（日本2、台湾1、香港1）であった。一方講師陣は、Human Genetics 誌上で盛んにL I S R E Lを用いて双生児研究を行っている、Prof. Nance (Medical College of Virginia), Prof. Boosma (Vrije Universiteit, Netherland), Dr Martin (Institute of Medical Research, Australia), Prof. Fulker (University of Colorado) のグループが担当した。コースはまず、講師がL I S R E Lのもとになるいくつかのモデルについて講義を行った後に、すでにコンピューターに入力してあるいくつかのサンプルについてプログラムの説明があり、その後、講師の指示に従って2、3人に一台の割合でI B Mコンピューターを使ってモデル内の各因子の重みづけを変えてプログラムを書換え、その回答を個別に出してみる実習が行われた。我々日本組は最初、最後列に陣取って聞いていたのだが、黒板から遠いのと、早口の英語のために、ほとんど一日目は何をしていたか戸惑いの連続であった。I B Mの使用は私にとって初めての経験であり、使い方もよく分からず、浅香先生にお尋ねしたり、隣のグループに聞いたりして何とか理解した。その日の終了後、私どもの奮闘をみていたのか、講師の一人が、理解できたかと尋ねてきたので、正直よく分からないと答えると、明日には朝一番に、日本からの学生が、最後列で理解できないといっているのだから前の人は変わって挙げてくれないかと大声で呼掛け、最前列に変わっていただいた。そうすると、字もよく見えるし、英語もそれなりに分かるし、不安だった昨日までとうてかわり講義も楽しいものとなった。その日の終わりまでには一日の授業の内容も理解できるようになり、思い切って質問したりしてようやく雰囲気になれてきた。L I S R E Lは双生児集団を用いて、その精神行動や、生体情報を、遺伝的なものと、環境要因とに分類し、その関与の度合を決定するマトリックス方程式であり、一卵性と二卵性との差異による情報をもとに各因子が決定される理論的根拠もよく理解できた。講義には、このプログラムの開発者であるJoreskog 博士もスウェーデンから参加され使用面での解説も行ってくれたが、

正直、内容が高度すぎて理解できなかった。しかし、L I S R E Lを絶対視する講師陣の風潮に統計学者として警告を発しておられたのが印象的であった。

このように、授業は理論的には行列式の計算であり、実習はMS-DOSの復習の様なもので、それ自体非常に面白かったが、このセミナーはまた、いろいろな意味でとても興味深いものであった。全員が寄宿舍に寝泊まりし、朝は7時に起床し、朝食をとり、ぞろぞろ歩いて教室まで行き、午前は授業、その合間にコーヒブレイクがあり、昼食は学生食堂で食べ、午後は再び授業、3時のコーヒブレイクそしてその後は自由時間、7時よりみんなそろって、フルコースの夕食が10時まで続き、その中で、お互いの情報交換や授業の反省などが行われ、二次会に行くものあり、るものあり、復習するものありと、おそらく外国の大学院に入学したらこんな体験をするんだろうなという経験を積んだ事は、私にとって非常に有意義であった。やはり英会話力が何よりも必要だと改めて感じたが、なによりも驚いたのは、このセミナーの参加者の大半が、医師ではないということだった。私は自分が医師であり、双生児研究のメリットは、遺伝的要因をコントロールした医学研究にしか視点がなかったのだが、双生児が成長する過程で両者の接触が、教育学、心理学的にみて、重要なテーマであることを目の当たりにし、なぜL I S R E Lがこの方面に重宝されているかが初めて理解された。振り返って、わが国では全体の研究者も少なく、この方面での活動も盛んとはいえないような気がして、夕食時に、将来の研究計画を目を輝かせて語る他国の教育学や心理学の学生たちに圧倒されていたのはなんとも残念であった。また、欧米の人たちは、本当に心から親切で、こちらが分かるまでいやな顔ひとつせず丁寧に教えてくれるし、みんなファミリーのように余裕をもって楽しそうに議論していた。もちろん、彼らとて厳しい競争社会の中にいるのだろうが、この余裕はいったいどこからくるのであろうか。時として、つつい上下関係に縛られた日本的答弁をしてしまう私に、講師の方々は手厳しい言葉を浴びせられたが、一生懸命自分でも画面に向い、キーボードを叩いている Prof. Nance をみて、自分の研究に対する自主性を問われ、大いに反省したものである。聞くところによると、3年後にはわが国でこのセミナーを主催するとのことであるが、かなり大変だと正直思っている。あれだけ親切にしてくださった人たちに何とか報いるべく一層研究に励み、その際にはお手伝いしたいと考えている。

取りとめのない雑談になったが、来年はコロラドで開催されるとのことで、日本からも多くの人が英語力を磨いて参加されることを望んでいる。最後にこのセミナーの参加に尽力頂いた、森本先生、今泉先生、中田先生、そして2週間席を同じくして頂いた浅香先生に感謝致します。

幹事会議事録

平成元年度第3回双生児研究会幹事会議事録

日時：1989年9月25日（月）11:00-14:00

場所：東京医科大学同窓会館3階会議室

＜出席者＞浅香昭雄、天羽幸子、井上英二、今泉洋子、岡島道夫、金森雅夫、
中田稔、吉田啓治、大木秀一

以下の事項が報告・協議された。

1. 佐藤幸男、山田一朗幹事の代わりに、金森雅夫、永井好弘（監査担当）会員が幹事として推薦された。
2. 第6回国際双生児研究会議の報告がなされ、第7回国際双生児研究会議は東京で1992年の夏に開催されることが決定したとの報告が行われた。
3. 第2回Twin Methodologyセミナーへの出席報告が行われた。なお第3回Twin Methodologyセミナーは、1990年の夏アメリカのコロラド州、第4回セミナーは1991年の夏にベルギーで開催の予定である。
4. 第7回国際双生児研究会議を学術会議と共同主催する為の申請をすることにした。
5. 第7回国際双生児研究会議の準備委員会が発足した。
6. 第7回国際双生児研究会議の準備費の一部として、双生児研究会から10万円を借り受けることにした。

平成元年度第4回双生児研究会幹事会議事録

日時：1989年11月7日（火）15:30-16:00

場所：東京医科大学同窓会館3階会議室

＜出席者＞天羽幸子、井上英二、今泉洋子、金森雅夫、早川和生、吉田啓治、
飯島純夫（代理）、白川太郎（代理）、大木秀一

以下の事項が報告・協議された。

1. 第4回学術講演会（1989年1月13日）の準備について報告された。
2. 第5回学術講演会の世話役として天羽幸子幹事が推薦された。
3. ニュースレター第6号の内容の執筆者と分担者が決められた。
4. ニュースレター編集責任者は、松井一郎幹事から金森雅夫幹事に変更になった。

※※ 双生児研究会第4回学術講演会開催のお知らせ ※※

- 【日時】 平成2年1月13日(土) 午後1時-5時
- 【会場】 大阪国際交流センター(小ホール)
〒543 大阪市天王寺区上本町8-2-6
(電話 06-772-5931)
- 【参加費】 会員 無料、非会員 1,000円(当日受付)
(年会費未納の会員は当日も受け付けます)
- 【懇親会】 講演会終了後、同じフロアの会議室“すみれ”で行います。
会費は1,000円です。
- 【世話人】 〒589 大阪府大阪狭山市大野東377
近畿大学医学部公衆衛生学 清水忠彦
問い合わせ(電話 0723-66-0221 内線 3272 早川和生)

☆☆ プログラムは全会員に事前に発送致します。 ☆☆

〈大会予定〉

【一般講演】(1:00-3:20 一演題につき発表7分質疑3分程度を予定)

開会の辞 清水忠彦(近畿大・医・公衆衛生)

- 1:00-1:40 出産・小児……………(座長:九大・歯、中田稔)
1. 夏目長門ほか(愛知学院大学・歯・口腔外)一卵性双生児の一方に生じた両側性完全口唇、顎、口蓋裂を合併した第一二鰓弓症候群に伴う顔面横裂例に関する出生より10年間の経過観察
 2. 吉田啓治ほか(東京医大・産婦)双胎に合併した単一臍帯動脈について
 3. 加藤恭子ほか(東京都神経研)東京都11病産院における多胎の先天異常発生頻度について
 4. 今井史郎ほか(大阪府立母子保健センター)双胎一児胎内死亡21例にみる出児の予後

- 1:40-2:10 心理・精神・養育……………（座長：都立大・文・心理、詫摩武俊）
5. 阿部和彦ほか（産業医大・精神医学）小児の行動の双生児研究 — 幼児期の人見知り、就眠時の行動、夜驚 —
 6. 赤松洋ほか（日赤医療センター・新生児・未熟児）異なった周産期異常を認めた1卵性三胎児の成長発達
 7. 早川和生（近畿大・医・公衆衛生）中高年齢に達した双生児における知能テスト（WAIS）得点の検討
- 2:10-2:40 衛生統計……………（座長：阪大・環境医学、森本兼襄）
8. 野中浩一ほか（帝京大学・医・衛生）双生児出産前後の fecundity は高いか？
 9. 今泉洋子（厚生省人口研）多胎児の周産期死亡率について
 10. 近藤郁子ほか（琉球大・医・人類生態）沖縄県における2卵性双生児の出生率の検討
- 2:40-3:20 疫学・成人病……………（座長：山梨医大・保健学Ⅱ、浅香昭雄）
11. 白川太郎ほか（阪大・医・環境医学）ライフスタイルによる健康影響評価における免疫学的接近（第5報）双生児集団における発生率調査
 12. 梶原敬三ほか（陣内病院）約15年間の経過後に再調査をし得た双生児15組の糖代謝について
 13. 山縣然太郎ほか（山梨医大・保健学Ⅱ）双生児におけるライフスタイルと健康度
 14. 竹下達也ほか（山梨医大・保健学Ⅱ）双生児の骨量に影響を与える諸要因の検討

【休憩】（3:20-3:30）

【総会】（3:30-4:00）

【教育講演】（4:00-4:30）

座長：天羽幸子（ツインマザースクラブ）
レーネ・ロノウ（演題未定）

【特別講演】（4:30-5:00）

座長：村田紀（千葉県がんセンター、疫学部）
清水忠彦（近畿大・医・公衆衛生）疫学領域における試み

【書評】

レーネ・ロノウ著 加藤則子監修 福井信子訳

「ふたごの妊娠・出産・育児」ビネバル出版 1989年

これまで、何十年も探し求めていたものに、やっとであえたというのが、本書読後の率直な感想である。双子についての研究書、専門書は決して少なくないが、双子を持つ両親や双子にかかわる職種のものに直接役立つ情報や意見を網羅した、これ程まとまった本は、これまで見たことが無かったからである。

著者自身が、「この本で私は、自分自身も含め、双子を持つ両親ならだれでも知りたいと思うことすべてについてお話しようと思います。私自身、双子が生まれる前、生まれたばかりの時、小さかったとき、それぞれの段階で、こういう本があればよいのに、と願った。そんな本を作ろうと思いました。」と述べていることからわかるように、双子に関する疑問や悩みを、最大もらさずいちいち取り上げてわかりやすく回答し、実際的な解決策を述べている。

この本についての第二の印象は、著者のやさしい思いやりが行間にあふれていると言う点である。双子を持つものが不安を抱いたり、挫折感におそわれたり、疲れ果ててしまったりすることがないようにという温かい配慮を随所に読み取ることができる。

たとえば出産に際して、分娩室ではどのような準備がなされているか、帝王切開とはどんな手術であるかというような点について、事細かに解説し、分娩を恐れる必要のないことを十分な説得力を持って説明しているし、帰宅後の生活について、人の手は大いにかりること、家事は手抜きすること、いつもユーモアを、などと述べて、母親が疲れ果てることのないように気を配っている。

また、記述が極めて具体的、実際的であることも、この本の大きな特色である。

例えば、二人の子に同時に授乳するやり方を図入りで説明し、おしめの換えや入浴についても、特殊な工夫や便利なやり方を具体的に述べている。

この本の構成や章節区分についてくわしく述べることは、わずらわしくもあり、意義も乏しいと考えるから、これ以上立ち入ることを避けるが、最後に本書の訳者について付言させていただくことにしたい。

もとより、デンマーク語を知らない者が訳文についてとやかく言うことは適当ではないが、少なくとも日本語で読む限りは、極めて自然な美しい言葉遣いで、訳文独特の違和感は全く感じられない。

読み進んでいく間に、もともと日本語で書かれた本であるという錯覚に陥る

こともしばしばで、医療や福祉の制度、生活習慣などがわが国と著しく異なる部分に行き当たったとき、あらためてこの本が翻訳書であったことに気付く有様であった。

そして、そのような場所には、間髪を入れず、監修者の註が付記されているのも行き届いた配慮であると思う。

いずれにしても、この本が、双子や年子を持つ両親はもとより、双子にかかわる医療職、看護職、保育職の多くの人々の目に触れるところとなれば幸いだと考えている。

(日本大学名誉教授 馬場一雄)

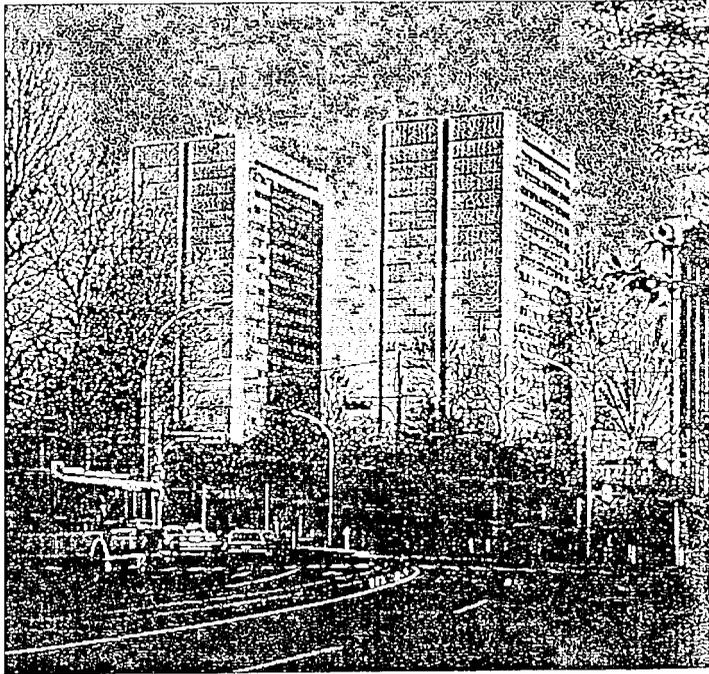
【新入会員】



会員募集のお知らせ

入会を希望される方は事務局までご連絡下さい。郵便振替用紙をお送り致しますから所属、所属の住所、氏名をご記入の上、年会費（3000円）を御送金下さい。

〒100 東京都千代田区霞が関 1-2-2
厚生省人口問題研究所内双生児研究会事務局



(東京青山のツインビル)

編集後記

今回のニュースレターは8月にローマで開催された、国際双生児研究会議の報告が中心となりました。ローマにいらっしゃらなかった皆様にも、少しでも会場の雰囲気伝わればよいと考えています。さて、本誌にも書かれているように、次期大会(1992年)開催地の日本招致が正式に決定しました。また、国際双生児研究協会会長に双生児研究会の会長である井上英二先生が就任されることになりました。今後、日本が双生児研究においてリーダーシップをとっていくためにも、ぜひとも会員の皆様の一層のご協力をお願いいたします。また、医学の分野のみならず、幅広い分野でご活躍の諸先生方の入会を、大いに歓迎いたします。

来年早々第4回の学術講演会が大阪で開かれますが、東京以外での開催は今回が初めてですので、一人でも多くの皆様が出席して下さることを希望しています。

今年も残すところ後わずかになりました。良き新年をお迎え下さい。

[大木]